審査の結果の要旨

氏　　名　　福　田　　学

本論文は、高等学校における筆者自身の授業実践を事例として、メルロ＝ポンティの身体論と言語論とに基づき、フランス語初期学習者の経験を記述し解明したものである。

第Ⅰ部では、主要な現象学的言語論を考察することにより、外国語初期学習者の経験を現象学的に考察することの意義と観点とが明らかにされる。特に、各現象学者において問題とされる、言語の普遍性と指示性の問題が、外国語初期学習において明らかとなることが導かれ、言語を身体的所作として捉えることと、言語の普遍性と記号的側面に着目することの必要性が明らかにされる。その結果、授業が意味の発生の場とみなせることになる。

第Ⅱ部第四章では、聞きとりに関わる授業の解明がなされる。まず「知覚的恒常性」に着目することにより、初期学習者の聞きとりが肉声と録音の相違や発声環境と密接に結びついていること、音声の概念的意味理解の背景である音声の相貌を捉える聞きとりが初期学習者によってもなされうることが明らかにされる。以上の解明により、言語そのものが感覚的世界に根づいている、というメルロ＝ポンティの主張が外国語初期学習者の経験において典型的となり、我々の言語活動を支えている基盤として現象学者に問題とされている事態が外国語初期学習者においても問題となっていることが導き出される。

第五章では、発声とその習得に関わる授業が解明される。学習最初期においては、発音は、知覚能力と一体になっているため、認識対象としてではなく、身体によって発音されるべきものとして学習者に現われることが明らかとされる。また、言葉を身体的所作と捉えることによって、言葉の意味が「極」となって学習者の身体を極化せしめ、正確な発音を引き出す事態を生起しうることが明らかとなる。それゆえ、発声能力が高まることは、一つのシステムとしての学習者の身体が高次の段階へと再組織化され習慣化されることになる、ということが明らかになる。

第六章では、意味の把握に関わる授業が解明される。学習場面が学習者にとって具体的であることは、言葉に対する己の発声可能性を実現することであることが明らかとされる。特に、外国語の歌の中の言葉が、リズムやメロディーを介して、学習者に所作として捉えられる様相を示すことにより、初期学習者が、辞書的意味を超えてより基底的な意味を把握しうることが明らかにされる。

本研究は、言語存在を受肉した論理や偶然性における論理とみなすメルロ＝ポンティの言語論に従い、外国語学習の初期段階において、言語の根本的性格が顕となる事態が生起していることを丁寧に描き出している。確かに、本研究は初期学習者の事例に限られており、学習段階が進んだ者の経験についての解明の必要性は否めない。しかし、本論文の解明は、外国語学習者にとって、学習の初期段階が非常に大きな役割を果していることを明示し、このことにより、外国語教育研究における重要な端緒を開いたことになる。以上のことから、博士（教育学）の学位論文として十分な水準に達しているものと認められる。